



——古着のリメイクをしながらも、「新しさ」を求めるファッションのシステムを否定するわけではないということですね。  
井村.. そうですね。材料に古着を使っています。毎シーズンコレクションを発表していることを考えると、私たちが「新しさ」を求めるブランドの一つではあると思います。

河村.. 僕らはいつも曖昧で、はっきりとした答えを示さない。「AかBか」という二つの選択肢があったとき、「どちらでもない」という立場をとることも一つの答えだと考えています。そして「どちらでもない」立場をとるためには、その大前提となるような二項の存在は重要です。

ブランドが今の状態になるまでも、そうした選択肢の間で揺れていたことがありました。以前僕は、流行を追いかけて新しい服を大量生産するようやり方があまり好きではありませんでした。ブランドを始めてからも、コレクションをやめようかと考えたくらいです。一方でファッション業界の流れから逸脱した、一点ものを作るブランドになるのも嫌で。そうした葛藤の中で僕らが出した答えは、ファッション業界の流れの中でリメイクをするというやり方です。「新しさ」を求めるファッション業界にいくらかの問題があることは事実ですが、それはそういうものとして割り切って楽しもうと思ったんです。大事なことは、ファッションの流動性を受け入れながら、古着のリメイクという形で自分たちが何を表現するのかということです。<RIGHT>はそうしたファッションの速い流



## YEAH RIGHT!!

れの中を転がるブランドの一つとして、これからも服を作っていくと思います。

——供給過多の現代において、私たちはどのような姿勢で服と関わっていくべきなのでしょう。

河村.. どこにお金を払うのかをよく考えて決めることが重要です。新しいものを欲するのは無理もないことで、それを我慢するのは難しいと思います。だからといって軽い気持ちで買ってしまわないで、「ななでこれにお金を払うんだろう」としっかり考えて納得することが必要です。その上で買うのであればサステイナブルなものじゃなくても良い。

服に限らず言えることですが、それが自分にどうなるのか、その先で誰がお金を受け取るのかということまで視野に入れてものを買うことが大事だと思います。

井村.. 私が服を買うときは、それがカッコいいというのは前提として、製作背景が分かるものにお金を払いたいと思います。食べ物もそうですが、作り手の顔が分かるものはやはり信頼できますよね。これからは自分がどういうものにお金を払っているのか、その背景も含めて自覚的であることが大切だと思います。

(註1) 東京都渋谷区にある服飾の専門学校。